

長門守護代の研究

田村哲夫

- 一 長門国守護職次第記の系統
 - 1 長門一宮系本
 - 2 長門二宮系本
 - 3 山口内藤家系本
 - 4 長府上田家系本
- 二 長門守護代と小守護代の系譜
 - 1 長門押領使
 - 2 長門守護と代官
 - 3 長門守護代と小守護代
- 三 四系統本原文比較表

一 国の守護・守護代の動向を知る史料として『若狭国守護職次第(群書類従補任部)』と共に、『長門国守護職次第(統群書類従補任部)』がある。この長門守護・守護代についての記録にも、いくつかの写本の系統があるので、まずこの系統から検討を加え、ついで各世代の守護と守護代および小守護代との関係について考察しようとするものである。

一 長門国守護職次第の系統

1 長門一宮系本

この書は『統群書類従』巻九十一に収録され、一般に流布しているが、その原本は長門一宮住吉神社所蔵のものである。まだその原本を見る機会を得ないが、山口図書館旧蔵『長門国守護代記(明治七年世良利貞写本)』、近藤文庫九八『大内氏実録土代』二六所収『長門国一宮大宮司次第記(一名長門探題記、明治二年近藤清石写本)』は長門一宮系本である。ここでは県廳記録社寺類一三『住吉・忌宮神社由緒調書』収録の『長門国守護職次第第一巻謄本』とあるものが、写本中の善本であるので、これを底本とした。

長門一宮本の成立期は、近藤清石写本によると、守護大内政弘の項の末尾、同義興の項の頭書に「以上一筆、以下別筆ナリ」と注記し、義興時代の明応七年(四九八)の記事で終わっている。政弘時代の明応初年に成立し、義興時代初期に追記されたものであると考えられる。

2 長門二宮系本

この書は長門二宮忌宮神社所蔵のもので写本であるが、長門一宮本とは別に作られたもので、むしろ次の系統と守護・守護代の記述が似かよっており、小守護代については大内義興以前は記録されていない。そして一枚目と二枚目の紙の継目の裏に「竜崎中務丞道輔之裏判在之」とあるが、竜崎道輔は義興の奉行衆で、明応四年(四九五)ごろから永正一〇年(五三三)ごろまでの人である。また書体も義興時代から何度か変わっているから、本書の成立は義興時代であろうと考えられる。なおこの書の特色は大内義隆没後、義長を経て毛利隆元・輝元時代までも記述し、長府毛利秀元の慶長七年(一六〇〇)に及んでいることであろう。また前書の長門一宮本は「御祈禱師一宮大宮司」の名前を各代に

記録しているのに対し、この長門二宮本は「御祈禱師二宮神宮寺別当」の名前を各代にわたって記入している。また平井温故著述の『豊府志略』に収録の「歴代守護職姓名」も大内義長以後長府毛利氏に至る記事を載せているので、この系統にあけておく。

3 山口内藤家系本

この書は『萩藩閥閥録』九の内藤小源太家(享保七年差出)に所収の『長門国守護代記』で、「右系図并守護代記事、興盛様依御所望、正本山口江上申之、御倉七在之、仍為後証案文誌置所如件 天文拾八年三月十五日 勝間田左近將監盛治」の奥書を持つものである。すなわち守護大内義隆の家老で守護代であった内藤興盛の小守護代勝間田盛治が天文一八年(一五六九)に銀上したものであるが、この原本はまだ発見されていない。

毛利家文庫公統類三六『江家秘録集』四ノ下収録、山口図書館旧蔵(七四一―一八三二)、多賀社文庫(七〇四―一〇〇八)、近藤文庫三三などの『長門国守護代記』はみなこの内藤系本の写である。いずれも山口県文書館所蔵である。

4 長府上田家系本

この書は宇部短大教授近木尙氏の実家であった長府藩士上田家旧蔵の一巻で、同氏から文書館に寄贈されたものである。この上田家の先祖は大内氏家臣陶朝倉氏であって、古から長府に在任していたという。この書の奥書には「右系図并守護代記、一族内藤興盛依所望、正本写遣、彼方倉置之、為後証案文誌置所如件 天文十八己酉之三月十五日 勝間田左近將監盛治」とあって、前書の内藤系本の奥書と似かよっているが、内容には他系に見ない記入もあるので別系あつかいとした。ただし写本としては脱字誤写と思われる箇所が多いので善本とはいえない。なお大内義隆後の義長時代の守護代・小守護代名を追記し、巻末に「平時享保十二丁未九月上旬書之」と写本の時期を伝えている。また中村徳美著述の『長門国志』巻六守護の項に収録されたものも大内義長の守護代・小守護代まで記載し、その氏名

も上田家本と同じであるのでこの系統にあげておく。

以上の四系統の『長門国守護職次第』『長門国守護代記』の原文比較表は終りにまとめておいたので参照されたい。

二、長門守護代と小守護代の系譜

1 長門押領使

押領使とは平安時代に朝廷が諸国の暴徒の鎮定や盗賊の逮捕などに当たらせられた職で、諸国の国司または郡司、あるいは土着の豪族で武芸に長じた者を選んでこの職に補した。もとは臨時的なものであったが、天慶の乱(九元)以後は常置の押領使となったようである。

長門国押領使職は豊西郡司の貞平・秀盛・広基の三代がまず勤めた。『江家秘録集本』には貞平の条に「イ桓武帝ノ末少納言右中将平好風子平中左兵衛佐貞平」と注記しているので、或は豊西郡司は平家一門の者が勤めたのであろうか。また広基は『吾妻鏡』の文治元年(二五)八月五日付文書に見える豊西郡司弘元のことであらう。

院政時代末から豊東郡司元家が四代押領使を勤め、五代は厚東郡司の武光がこれに代った。この武光は厚東氏の七代の武士交名中に長門国厚東入道武道と見えるが、恐らくは武光のことであらう。『源平盛衰記』の平家一の谷城を構える条に、平家合力の諸国の

その次に平清盛が長門の押領使職となったが、清盛が実際に長門に来たのではなく、代官が長府に下って実務をとったであらうが、或は土着の厚東郡司武景(武光の子)が代官として実務をとったのではあるまいか。なお武景は入道して寂尊と号し、承久頃に鎌倉で病死したようである(厚東系図)。

平家の壇浦滅亡によって源頼朝の弟範頼が平家領没収跡地を知行して長門の押領使職となったのであるが、これも代官が範頼の名で実務をとったことであらう。ついで頼朝の功臣土肥実平が長門の惣追捕使に任ぜられた。実平は子の遠平を代官として長門に下し実務にあたらせている。

2 長門守護と代官

守護は文治元年(二五)十一月、源頼朝が大江広元の献策によって、一国単位に守護を、国衙領・荘園などに地頭を設置したことに始まる。そしてその任命には幕府を開くにあたって功勞のあった関東の豪族の御家人が選ばれた。

長門では惣追捕使の土肥実平が最初の守護職に任ぜられ、代官遠平は荘園阿武御領の地頭職に補せられ、文治五年(二八)ごろまで支配している。また実平の代官を土岐次郎ともしているが、土岐系図には「土岐判官光行―土岐次郎光俊」となっている。

土肥実平が長門守護を罷め、翌文治二年に同じく源頼朝の功臣佐々木高綱が代って守護となり、同年七月一三日に長門に下国すとすも、実際は高綱自身は下らず一族の者が代官として下ったことであらう。高綱は建久四年(二九)まで在職し、次には兄の定綱が長門守護職に任ぜられ、甥の橋次公久がその守護代となっている。定綱は元久二年(三三)に病死し、その長男広綱が守護となったが、承久三年(三三)後鳥羽院に属し誅されたので、小鹿島橋公業(番長)が代って三ヶ月間守護職を勤めた。また承久の乱の結果、幕府は阿武御領を長門守護公業に与えたが、二、三ヶ月して勤子内親王に伝領されることを認めているのもこの時代である。

さて『武久氏系図』によると、永富時永、初公祐又公長、長門国守護代、建久五年(二九)四月五日卒、法名了忍とし、その子永富公業、又祐時、薩摩守、長門守護職、寛元三年(三三)九月十日卒、法名玄空と見えるが、中村徳美は『橋氏系図』により橋公長の次男橋次公成を「今按ニ久恐ラクハ成ノ写誤ニテ公成ト同人ナラムカ」今按ニ東

鑑ニ公成トモ公業トモアリ、何レモ橘次トアリテ、成業モ同訓、時代モヨク符ヘバ同人ナルコト著シ」と説明し、橘公久（二三四）公成（二三五）公業と考えている。『武久氏系図』の説の方がよいか、『橘氏系図』の方をとるべきか、今後の課題としておこう。いずれにしても佐々木氏一族の者であろうと思う。

この公業の次は天野政景が貞応元年（二二二）に長門守護となり小田村光兼が代官を勤め、ついで長門守護天野義景、同代官大塚康親と代った。政景の妻は北条義時女であり、義景の妹は松下禪尼で北条経時・時頼等の母であったので、承久の乱以後は北条氏一門が長門守護職を握ったと考えてよい。政景は宝治元年（二二四）の死、義景は建長五年（二三五）の死亡である。義景の後は義景の娘むこで北条氏の重臣であった二階堂行忠が守護職に任ぜられ、三井資平が代官を勤めた。『三井氏本系図』には「建長年中人王八十八代後深草院久仁御宇、長州之守護十六代、將軍一門信濃四郎左衛門尉行忠判官入道行一、今時資平任長州守護代職云云」と見え、以後三井氏は長門に土着した。

このころ蒙古の襲来に備えるため、執権北条時宗はその末弟宗頼を建治二年（二二五）に長門守護に任じ、長井太郎頼茂を代官とし、同年一月一日長府に下着せしめている。以後は山陽・山陰まで管轄する長門探題として北条氏一門の世襲となった。宗頼は弘安二年（二二九）死去したので、その子兼時が翌年六月守護に任じられている。兼時の代官は初め前代につづいて長井出羽太郎頼茂（字部福原系図）であり、ついで岡田次郎左エ門入道浄連であった。

兼時に代って従兄師時が弘安四年（二三〇）閏七月晦日長府に下り、三浦氏一族の駿河三郎がまず代官となり、ついで平内左衛門尉が代官を勤めている。

北条師時の後はその子の貞規が嵐野家盛を代官として翌弘安五年八月二四日長府に着き、弘安七年（二三二）には九州探題北条真政（実政）が任せられ、平岡為時（北条時村の子為時か、弘安九年死）が守護代となっているが、この時代から長門守護と周防守護とを兼帯し、諸国の一般の守護以上の強大な権力を持つようになった。

ついで永仁六年（二二六）北条時村に代り、その子為時の次男時仲が代官となって同年八月一日長門に着府している。また守護代には吉良将監、つづいて小笠原入道連念が補せられた。そして長門一宮には正安二年（二二〇）閏七月二三日付連念署名の文書がある。また長門二宮には北条時仲関係の文書数通を所蔵している。なお吉良氏は「吉良系図」によると「吉良上総介経家―吉良修理大夫貞家、奥州一方管領、弟吉良左近将監貞経」と見える貞経のことか。小笠原連念は阿波小笠原氏の一族かと考えられる。

やがて討幕の計画が進められているころ、北条真政（実政）の兄時直が長門探題となっていた。長門厚狭郡正法寺所蔵の元亨三年（二二三）八月一三日付上野前司（北条時直）あて六波羅施行状がその初見であろう。守護代は横溝清村であるが、横溝氏も北条氏一族であろうか。元弘三年（二三三）に執権北条高時が誅せられ、探題時直はその五月二六日降伏して北条氏世襲の長門探題の幕はとじられた。

さて建武の中興に当っては、周防国の守護には大内氏庶族の大内長弘が補され、長門国の守護には輔大納言（豊田氏一族ともいう）が補され、山田入道千恵が守護代となったが、まもなく長門の豪族厚東武実が代って守護となり、建武元年（二三二）五月一四日に長府に入部した。守護代は一族の富永弥六入道である。ついで足利尊氏の反乱に應じた防長の守護は尊氏方の守護として建武三年（二三三）二月に補された。厚東武実は貞和四年（二三四）三月五日に子の武村に長門守護職を譲り、守護代も富永武通に代った。ところが翌年四月足利尊氏の次男直冬が中国探題（太平記）に補され、防長は直冬の管理下に入った。直冬の代官は仁科左近大夫将監で、守護代は柳田太郎左衛門尉であった。ついで観応二年（二三三）長府守護職は武村の子武直が継ぎ、二月廿日（或一月二日）長府に入った。守護代は引続いて富永武通であった。

一方周防国では大内氏宗家の弘世が南朝方の守護として、北朝方の守護大内弘直（長弘次男）と主導権争いをして

いた。ところが長門探題足利直冬は正平七年(文和元年一三三〇)十一月南朝方に帰順したので、南朝方の周防守護大内弘世は勢いをえて周防国内の北朝方を降した。嘗時長門国では北朝方の守護厚東武直が文和二年(一三三二)十一月に死去し、その子義武が富永武通を守護代として長府に入っていた。

さて周防を平定した大内弘世は早速正平一〇年(一三三三)ごろから長門に進出、同十三年厚東義武は抗しきれないで本城の霜降城(しもふり)をすてて九州に走った。その年六月二三日には功によって大内弘世が南朝方の長門守護を兼ね、長府に入部して長門一二両宮に参詣している。ところが北朝方足利氏の誘いに応じた弘世は、防長両国守護職を認めることを条件として、貞治二年(正平一八年、一三三三)二月北朝方に転じた。一方九州にのがれていた厚東義武はこの処置を怒り、南朝方に転ずると共に九州の官軍の応援により長門回復をはかったが、正平二三年(応安元年、一三三六)二月三日付の義武宛行状(恒石八幡宮文書)を最後に厚東氏(恒石八幡宮文書)の消息を断った。こうして建武元年(一三三四)から約三五年間の厚東氏の長門守護時代は終わりをづけ、正平一三年(一三五六)から約二〇〇年間にわたる大内氏の長門守護時代が始まったのである。

3 長門守護代と小守護代

大内氏歴代守護職のことは省略し、主として長門守護代の記事を中心に考察し、その小守護代の系譜にも言及してみよう。

弘世 最初の守護代は森入道良恵で、貞治四年(一三三三)の防府天満宮棟札に見える森兵衛次郎入道良恵(上司家文書)のことである。森氏については暦応二年(一三三九)の大内長弘遺行状の宛名にある森五郎左衛門尉殿(東福寺文書)が初見であろう。また前記の棟札にも森掃部助尚弘・森孫四郎重家の名が見えるが、その一族であると思われる。その次には宮河入道良覚が守護氏となった。この宮河氏も前記棟札に見える宮河兵庫助頼直・宮河孫左衛門尉幸政らの一族であろう。ついで杉又次郎入道智静が守護代となる。この智静は康暦二年(一三三〇)五月一〇日の長府柴山(さかやま)の戦で戦死した人(花巻三代記)である。その次の守護代黒河近江守貞信は大内氏の一族で、大内弘貞の弟貞保の孫(大内氏系図)という。前記の棟札および永和元年(一三三三)の同棟札に近江守貞信の名が見える。次は陶宮内少輔(後任)周防守弘綱が守護代となったが、陶氏も大内氏一族であり、大内盛房の弟右田盛長五代の孫弘賢を陶氏の祖とし、その長男弘政の弟が弘綱である。貞治四年の棟札に前越前守弘政の名があり、永和元年の棟札には周防守弘綱の名が見える。弘世時代最後の守護代には杉又次郎入道智静が再任されていた。

義弘 永和元年(一三三五)三月二一日長府に入府した義弘の守護代はすべて杉氏一族で、まず杉信濃守重直が補せられ、次に杉大炊允(後任)儀安、次はその子四郎範安が補されて、杉智静以来大内氏の重臣となり杉氏隆盛の基礎を築いた時代である。また最初の長門小守護代として久佐備後入道源祐の名が見えるが、久佐氏は杉氏の被官かと思われる(佐田文書)。

弘茂 応永六年(一三九九)二月二一日泉州堺で討死した義弘の弟弘茂は足利義満に降り、防長両国の守護職を認められ、翌年七月に京都を発して兄盛見と長府を舞台にして戦ったが、同八年二月二九日敗死した。この間の守護代は義弘以来の武將陶山佐渡守高長で同時に戦死している。小守護代は赤崎三郎左衛門入道道清であった。赤崎氏のこと不明である。

盛見 弟弘茂を敗死させた盛見は応永九年(一四〇三)一月一一日山口に凱旋している。最初の守護代は父弘世時代の重臣陶弘政の長男弘長で、陶尾張入道道琳という。その小守護代は江良太郎左衛門入道広慶で、弘茂敗死翌日の二月晦日に長府へいち早く着府している。この広慶署名の文書は応永九年四月五日付(龜山宮文書)、応永一一年九月二七日付・同一三年八月三日付(以上長門一宮文書)があり、江良氏は代々陶氏(けいん)家人の家柄であった。次は陶治部少輔(後号)中務少輔盛

長が守護代で、弘世時代の守護代弘綱の三男から前守護代弘長の養子となった人である。この盛長の小守護代は安岐大炊助盛輔であるが、文書としては長門一宮文書の応永二五年(四二〇)八月五日付から翌年六月六日付のもの四通に見える。しかし安岐氏の詳細は不明であるが、陶氏の家人であったと考えられる。その次に守護代陶徳房殿と見えるが、盛長の子盛政のことで、安岐盛輔が引続き小守護代であった。ついで陶氏に代って初めて周防の豪族内藤氏が守護代の職に登場してくる。すなわち内藤肥後入道智得こと盛貞で、その小守護代となった弟の勝間田左近将監後任 備前守盛実は応永二年(四二〇)一二月二〇日まず長府に入ったが、内藤智得は在京中であつたので、その長男の弾正忠盛賀が翌二八年二月一日に代官として入府し、長門一二両宮に参詣している。智得は応永一七年(四二〇)一二月二日付文書(意旨文書)以後に見える法号で、系図によると永享一〇年(四二六)四月一日八才で死去した。また代官盛賀はこれより先の永享三年(四三三)六月二十八日守護盛見に随い筑前深江で戦死している。小守護代盛実は正長二年(四三九)三月二一日付文書(長門一宮文書)を最後に姿を消し、同年八月二二日から長男孫六後任 左近将監盛益が相続入府した。

持世 この守護職時代の記事は長門一宮系本のみに見える、他系本ではこの一代を認めていないので、以後の守護職代数は長門一宮系本だけが一代多い代数になっている。さて一宮系本では前守護盛見戦死の直後の永享三年七月三日から義弘の長男持世が長門を管領し、内藤智得の次男藏人丞後任 美濃守盛貞を守護代に、勝間田左近将監盛益を前代につづいて小守護代に補したとしている。しかしこの間には持世と弟の持盛が大内家の家督を競望していた時代であるが、長門守護職のことは『満濟准后日記』永享三年九月三日の条に「自三大内雜掌(安富定範)一内藤入道(智得)方状隨身、此状申入趣隠密之儀也、大内三人、新介(持盛)・刑部少輔(持世)・中務大輔(満世)国配分事、故徳雄入道(盛見)存日間、申三入勝定院殿(足利義持)一、周防国ヲバ新介身ニ當御判拝領、長門国ヲバ刑部少輔身ニ當御判拝領了、中務大輔ハ故鹿苑院殿(足利義満)御代長門国一郡拝領了」とあるように、盛見存命中すでに持世に長門国

を、持盛に周防国を管領させていたのであるが、大内氏家督の決定はしていなかった。ところが幕府評定の結果は持世が周防国、持盛が長門国と入れかわり、同年一〇月二三日に至り「大内刑部少輔持世可レ為三惣領一之由御判、並新介持盛長門国以下安堵御判、悉今日於三色左京大夫(宿所)一召三寄大内雜掌安富(定範)一渡云々」(満濟准后日記)とあつて、持世が盛見の家督をつぎ、持盛が長門一国と安芸東西条の地を安堵せられたのである。

持盛 兄持世を長門国から石見国三隅城に走らせた持盛は、永享四年(四三三)二月一三日長府に入部した。この時の守護代は内藤氏からまた陶氏にかえり、盛見時代守の護代陶越前守盛政と小守護代安岐大炊助盛輔が再任され同日着府しているので、大内氏家督争いに守護代争いがからまっていたことと推察される。

持世 一ヶ月間石見三隅城にのがれていた持世は永享四年三月一五日周防山口に還つたので、弟持盛はまた豊前に退き、四月一六日に持世は修理大夫に任せられると共に、持盛の先知長門国と安芸東西条を幕府から受けている。ここに持世は防長両国守護となり、前長門守護代陶盛政を周防守護代に代え、長門守護代には新に大内一族の鷲頭肥前守盛範永享六年 各改弘忠を任じ、同年四月二二日長府に入らしめた。小守護代円山因幡入道道源の代官養子円山左近将監氏兼も同日入府した。その後小守護代は永享六年(四三四)八月に円山左馬助兼連、翌七年一月五日には有吉伊賀入道浄仙が入府、ついで大内氏の庶族野田民部丞後任 備後守為弘が同年八月三日長府入りしている。

教弘 前守護持世が嘉吉元年(四四一)七月二八日京都で死去したので、盛見の次男教弘がついだ。守護代・小守護代には前代につづき鷲頭肥前守弘忠・野田備後守為弘が補せられた。ついで文安三年(四四六)四月一五日には一時小守護代を闕いだが、つづいて野田為弘の子治部丞弘賀が小守護代となった。ところが、翌年八月二二日に至り守護代の交代があり、再び内藤美濃入道有貞(盛貞)が守護代に補された。これ以後内藤氏が長門守護代職を世襲し、周防守護代は陶氏が世襲した。また杉氏は豊前守護代を世襲したのである。なお小守護代には内藤氏家人の南野左馬允後任 若狭守

盛時が補され、文安四年九月二四日長府に入った。一方、前守護代の鷲頭弘忠は理由不明であるが、教弘のため文安五年二月一七日に長門深川で誅伐されている。この弘忠署名の文書としては文安四年八月一日付〔百箇八幡宮文書〕のものが最後で、小守護代南野左馬允あての文書は文安五年六月二七日付〔百箇八幡宮文書〕のものに初めて見えるので、長門守護交代の時期も長門二宮本だけに見える月日でよいと考えられる。

ついで守護代には長男の内藤大炊助後任下野守
又任肥後守盛世が補され、文安五年〔四四〕八月六日入府し、小守護代には南野若狭守盛時が再任された。長祿三年〔四三〕二月二五日付忌宮文書に南野若狭守あて文書が残っている。その後小守護代は盛時の子南野縫殿允盛道寛正六四一賦
大膳進盛鎮に代った。

政弘 長門一宮系本では守護教弘の長男政弘が長門国を管領した日を享徳三年〔四三〕一月よりとしているが、教弘は寛正六年〔四三〕九月三日伊予国興居島出陣中に四六才で急死したし、政弘の誕生は文安三年〔四二〕であるから、享徳三年の時はわずか九才の幼年期であり疑問である。『内藤氏系図』によると、内藤美濃入道有貞は享徳三年一月八日に六九才で死去しているので、この管領の年月は内藤氏の守護交代期を指すもので、教弘守護時代に内藤盛世が長門守護代となった年月と考えるべきであろうか。守護代には内藤下野守享徳二年一月
改肥後守盛世、小守護代には南野大膳進盛鎮が教弘時代からつづいて補された。守護代盛世は応仁二年〔四六〕一〇月一日死去〔内藤氏系図〕したので、長男中務丞武盛が守護代をついだ。『大乘院寺社雜事記』の文明二年〔四〇〕二月九日の条に見える内藤中務丞武盛がその証である。のち武盛は大内教幸に味方し敗れて雲水となり行衛知れず、弟弥七後任彈正忠
又後肥後守弘矩があとをついだ。時の小守護代には前代から引つづいて南野大膳進盛鎮が勤めていたが、厚安芸守に代り、また伴田入道有盛に代った。そして長門厚東氏から内藤氏の家人となった永富因幡守嗣久が文明四年〔四二〕四月八日小守護代として長府に入り、守護代内藤弘矩も同年八月一日には騎馬百余人を引つれて初めて入府した。

義興 守護政弘は明応三年〔四三〕秋ごろから中風が再発して病床にあった。ところが翌年二月守護代内藤弘矩は政弘の子高弘を擁立して謀叛せんとしたことを、周防守護代の陶武護が政弘嫡男義興に讒言したので誅伐された事件があった。ついでその年五月に政弘は正式に家督を義興に譲り、九月一八日に死去した。そこで『守護代記』に義興の最初の守護代を内藤弘矩としているのは当を得ていない。また小守護代は永富嗣久の嫡男彦左衛門貞嗣、その次を貞嗣嫡男の五郎矩詮としているが、いずれも内藤弘矩が守護代時代の小守護代であるので、守護義興以前の補任と考えられ、弘矩誅伐後も引続き小守護代の職にあったものであろう。なお『江濃記』によると大内義興は中国探題とも呼ばれていたようである。

この義興の最初の長門守護代は内藤弘矩の弟掃部助弘春で、明応六年〔四七〕九月五日に補任され、小守護代には永富氏と交代して内藤一族の勝間田氏が再び登庸され、まず勝間田左近將監矩益〔盛益長男〕がなり、同年一二月二四日長府に入っている。また守護代内藤弘春は文龜二年〔三三〕一月七日死去し、その長男内藤彦太郎後任彈正忠
又任下野守興盛がつぎ、翌三年一〇月四日入府した。小守護代は初め勝間田矩益が前代につづいて勤めたが、まもなく長男の大炊助春運に譲り、ついで春運もまた長男の与一後任
左近將監盛家に永永四年〔三九〕一二月二六日に小守護代職を譲った。義隆 守護義興は享祿元年〔三六〕一二月二〇日に死去し、長男義隆が守護職をついだが、守護代・小守護代とも父義興時代のまま継承している。小守護代はその後の天文一二年〔四三〕一二月二二日に勝間田盛家の長男孫六天文一七正三
任左近將監盛治に代り、同二四日入府している。天文一八年〔四九〕三月一五日付の『長門国守護代記』を書いたのはこの長門小守護代勝間田盛治である。

義長 守護義隆は家老であり周防守護代であった陶隆房の謀叛により天文二〇年〔四五〕九月一日自害した。ついで陶隆房〔のち晴賢〕は豊後大友義鎮〔宗麟〕の弟晴英〔のち義長〕を擁立して大内氏を襲がしめた。翌二一年三月山

口に入る。

以下長門二宮本によって長門守護代と小守護代の名をあげて見た。義隆時代の守護代は義隆時代のままであったようである。そして守護代内藤興盛は天文二二年七月一日付文書(勝間八幡宮文書)を最後に、その一二月には死去したようである。そのあとは長男隆時の嫡子彦太郎任彈正忠隆が守護代をついだが、弘治三年(二五三)四月二日毛利元就勢の攻撃を受け、長府且山城かつやまで自害し、守護大内義長もその翌日自害して果て、二〇〇年間にわたる大内氏の長門国守護は終わりをつけた。

隆元 弘治三年二月二〇日毛利隆元は内藤左衛門大夫隆春(興盛の子、隆元夫人の弟)に長門国守護役のことは従来の如く沙汰する旨の書状を与えた(内藤家文書)。また小守護代は勝間田盛治の子孫大炊助にわたる。春景であった。なお毛利隆元が正式に長門国守護職に補せられたのは永祿五年(二五六)九月一九日である。

輝元 守護役毛利隆元は永祿六年八月四日急死し、その長男輝元がついだ。しかし輝元が正式に長門守護職に補せられた事実はないが、長門の国務を握っていたことは事実である。故に正式に長門国守護職があったのは毛利隆元まで、長門二宮本の輝元以後の記載は慣例にしたがって記されたものであろう。以下の記事は次の表の末尾をご覧いただきたい。

三、四系統本原文比較表

<p>〔長門一宮本〕 〔統群書類従本〕</p> <p>長門国守護職次第 豊浦郡者 仲哀天王二年被立之 仍仲哀九年 神功皇后六十九年 応神天皇四十一年 三帝城 仁徳天皇元年被移難波城 長門国平家以往守護職 元者号押領使職</p>	<p>〔長門二宮本〕 〔豊府史略収録本〕</p> <p>豊浦郡者 仲哀天王二年被立之 仍仲哀九年 神功皇后六十九年 応神天皇四十一年 三帝城 仁徳天皇元年被移難波城 長門国平家以往守護職 元者号押領使職</p>	<p>〔山口内藤家本〕 〔江家秘録集本〕</p> <p>長門国守護代記 豊浦郡者 仲哀天王二年被立之 仍仲哀九年 神功皇后六十九年 応神天皇四十一年 三帝城 仁徳天皇元年被移難波城 長門国平家以往守護職 元者号押領使職</p>	<p>〔長府上田家本〕 〔長門国志収録本〕</p> <p>長門国守護代記 豊浦郡者 仲哀天皇二年被立之 仍仲哀九年 神功皇后六十九年 応神天皇四十一年 三帝城 仁徳天皇元年被移難波城 長門国平家以往守護職 元者号押領使職</p>
<p>一 貞平 此時大宮司撰津 前司賀田範方</p>	<p>一 貞平 御祈禱師二宮神 宮寺別当慶連</p>	<p>一 貞平</p>	<p>一 貞平</p>

二 秀盛 同範貞	二 秀盛 同慶連	二 秀盛	二 秀盛
三 広基 同範貞	三 広基 同慶西	三 広基	三 広基
四 豊東郡司元家 此時大宮司重貞	四 豊東郡司元家 同慶西	四 豊東郡司元家	四 豊東郡司元家
五 厚東郡司武光 大宮司同重貞	五 厚東郡司武光 同慶祐	五 厚東郡司武光	五 厚東郡司物部・姓・武光
六 安芸守清盛 同重貞	六 安芸守清盛 同慶祐	六 安芸守清盛	六 安芸守平・清盛 号太政大臣・淨海入道 桓武天皇十三世也
七 厚東郡司武景 大宮司包貞	七 厚東郡司武景 同増慶	七 厚東郡司武景	七 厚東郡司物部・武景
八 三河守殿・範頼 没収跡地頭職御知行、被任佐渡守 同包貞	八 参河守範頼 被任佐渡守、没収跡地頭職御知行之 同増慶	八 三河守殿 範頼 没収跡地頭職御知行、被任佐渡守	八 三河守源・範頼 没収跡地頭職御知行被任佐渡守 清和帝十代源義朝之五男也、此末吉見家也
九 土肥次郎実平 号惣追捕使	九 土肥次郎実平 号惣追捕使 <small>(継目裏書 竜崎中務丞通輔之裏判在之)</small>	九 土肥次郎実平 号惣追捕使	九 土肥治・良・実平 号惣追捕使 桓武帝末葉平姓也、父景平者源義信ノ息也

代官土岐次郎 大宮司吉貞	代官土岐次郎 同増慶	代官土岐次郎	土肥家ハ小早川祖也 御代官土肥・治郎
十 佐々木四郎左衛門尉 高綱 自大将殿、文治二年給之、七月十三日下国、号守護職 同吉貞	十 佐々木四郎左衛門尉 高綱 自大将殿、文治二年守護職給之、七月十三日下国 同増慶	十 佐々木四郎左衛門尉 守綱 自大将殿、文治二年給之、七月十三日下国、号守護職	十 佐々木四郎左衛門尉 高綱 近江源氏秀義四男宇多天皇九代後胤自右大将頼朝公、文治二丙午年賜之、同治二丙午年賜之、同七月十三日下国、号守護代
十一 佐々木太郎判官貞綱 高綱舎兄 守護代甥橋次公久 同吉貞	十一 佐々木太郎判官貞綱 高綱舎兄 守護代甥橋次公久 同定生	十一 佐々木太郎判官貞綱 高綱舎兄 守護代甥橋次公久	十一 佐々木太郎判官貞綱 高綱舎兄 守護代橋次公久 貞綱甥也
十二 佐々木左衛門尉広綱 任判官 大宮司種貞	十二 佐々木左衛門尉広綱 任判官 同定生	十二 佐々木左衛門尉広綱 任判官	十二 佐々木左衛門尉広綱 貞綱息也
十三 薩摩守公業 承久三年七八九、三ヶ月知行	十三 薩摩守公業 承久三年七八九、三ヶ月知行	十三 薩摩守公業 承久三年七八九、三ヶ月知行	十三 薩摩守公業 承久三辛巳之七八九三ヶ月知行

十四 天野和泉守政景 貞応元給之 代官小田村左衛門丞 大宮司親貞	十四 天野和泉守政景 貞応元給之 代官小田村左衛門尉 光兼 同定生	十四 天野和泉守政景 貞応元給之 代官小田村左衛門尉 光兼	十四 天野和泉守政景 貞応元給之 代官小田村左衛門尉 光兼
十五 天野新左衛門尉義景 代官大塚土左衛門 康親 同親貞	十五 天野新左衛門尉義景 代官大塚土左衛門尉 康親 同照親	十五 天野新左衛門尉義景 代官大塚土左衛門尉 康親	十五 天野新左衛門尉義景 代官大塚土左衛門尉 康親 (十五ハ脱落)
十六 信濃四郎左衛門尉行 忠 号判官入道行一 代官三井宮内左衛門 資平 同親貞	十六 信濃四郎左衛門尉行 忠 代官三井宮内左衛門 尉資平 同照親	十六 信濃四郎左衛門尉行 忠 代官三井宮内左衛門 資平	十六 二階堂信濃四郎左衛 門尉藤原行忠 御代官三井九内左衛 門資平
十七 相模修理亮殿宗頼 建治二年正月十一日 当国下着	十七 相模修理亮殿宗頼 建治二年正月十一日 下国	十七 相模修理亮殿宗頼 建治二年正月十一日 当国下着	十七 相模修理亮殿宗頼 建治二丙子之正月十 一日当国へ下着

御代官 <small>(長井)</small> 太郎殿頼茂 大宮司宮貞	同年代官太郎殿頼茂 同定賢	代官太郎殿頼茂	御代官太郎義茂
十八 越後守殿兼時 弘安三六五 御代官長井出羽太郎 其後岡田次郎左衛門 入道浄連 同宮貞	十八 越後守殿兼時 弘安三六五 代官長井出羽太郎 其後岡田次郎左衛門 入道浄連 同惠尊	十八 越後守殿兼時 弘安三年六月五日 御代官長井出羽太郎 其後岡田次郎左衛門 入道浄連	十八 越後守兼時 弘安三庚辰之六月十 五日 御代官長井出羽太良 其後岡田治良左衛門 尉浄連
十九 武蔵守殿師時 御代官駿河三郎殿 弘安四閏七晦日下国 又代官平内左衛門尉 大宮司遠貞	十九 武蔵守殿師時 弘安四閏七晦 代官駿河三郎下国 其後代官平内左衛門 尉 同惠尊	十九 武蔵守殿師時 弘安四年潤七月晦日 御代官駿河三郎下国 其後代官平内左衛門 尉	十九 武蔵守師時 弘安四辛巳閏七月晦 日著府 御代官駿河三郎 其後平内左衛門尉
廿 万寿殿 武蔵守殿御子 息 <small>(北条貞規)</small> 後武蔵十郎申 御代官嵐野五郎左衛 門家盛 弘安五八廿四着府 同遠貞	廿 万寿殿 十郎申 武蔵守殿子息 弘安五八廿四着府 代官嵐野五郎左衛門 尉家盛 同惠尊	二十 万寿殿 十郎申 弘安五年八月廿四日 着府 御代官嵐野五郎左衛 門家盛	二十 万寿殿 十郎申 弘安五壬午八月廿四 日著府 御代官嵐野五良左衛 門尉宗盛

廿一 <small>(北条)</small> 上総介殿真政 弘安七正十七下国 守護代平岡二郎左衛門尉為時 同遠貞	廿一 上総介殿真政 弘安七正十七下国 永仁四十一・二十一博多被移 守護代平岡次郎左衛門尉為時 同惠尊	二十一 上総介殿真政 弘安七年正月十七日下国 守護代平岡次郎左衛門尉為時 九州探題	廿一 上総助殿真政 弘安七甲申七月十七日下向 守護代平岡治良左衛門尉為時 九州探題
廿二 <small>(北条)</small> 左京権大夫殿時村 御代官左近大夫將監 永仁六八十一着府、任近江守、又尾張守 守護代吉良殿、又小笠原入道連念下国 同遠貞	廿二 左京権大夫殿時村 守護代左近大夫將監時仲、永仁六八着府、任近江守、又尾張守 守護代吉良殿 守護代小笠原入道連念 同慶尊	二十二 左京権大夫殿 永仁六年八月十一日着府、御代官左近大夫將監時仲、後任近江守、又尾張守 又守護代吉野、其次小笠原入道連念下国	廿二 左京権大夫殿 永仁六戊戌八月十一日著府 御代官左近大夫將監時仲 任近江守 又尾張守 守護代吉野將監 其後小笠原連念下国
廿三 <small>(北条)</small> 上野殿時直 守護代横溝小三郎清村 同遠貞	廿三 上野介殿時直 守護代横溝小三郎清村 同慶尊	二十三 上野殿時直 真政舎兄 守護代横溝小三郎清村	廿三 上野助時直 直政舎兄 守護代横溝小三郎清村
廿四 輔大納言殿 守護代山田入道千恵 大宮司貞遠	廿四 輔大納言殿 守護代山田入道千恵 同慶尊	二十四 輔大納言殿 守護代山田入道千恵	廿四 輔大納言殿 守護代山田入道千恵

廿五 <small>(武家)</small> 厚東太郎入道殿 法名崇西	廿五 厚東太郎入道殿 法名崇西	二十五 厚東太郎殿 法名崇西	廿五 厚東太郎物部武実 景西 建武元年甲戌五月十四日当府入部 守護代富永弥六入道
廿六 厚東駿河権守武村 貞和四三五給之 守護代同太郎左衛門武通 同貞近	廿六 厚東駿河権守武村 貞和四三着府 守護代太郎左衛門尉武通 同慶尊	二十六 厚東駿河守武村 貞和四年三月五日給之 守護代同太郎左衛門尉武通	廿六 厚東駿河守物部武村 貞和四戊子之三月五日給之 守護代厚東太良左衛門尉武道
廿七 <small>(足利)</small> 兵衛佐殿直冬 御代官仁科左近大夫將監 守護代柳田太郎左衛門 同貞近	廿七 兵衛佐殿直冬 御代官仁科左近大夫將監殿 守護代柳田左衛門尉 同行慶	二十七 兵衛佐殿直冬 御代官仁科左近大夫將監殿 守護代柳田太郎左衛門尉	廿七 忠兵衛源直冬 尊氏公ノ二男 御代官仁科左近將監 守護代柳田太良左衛門尉
廿八 厚東長門守武直 観応二年十二廿府中入	廿八 厚東長門守殿武直 観応二十一二当府入部	二十八 厚東長門守武直 守護代備前守武通 観応二年十二月廿日	廿八 厚東長門守物部武直 観応二辛卯之十一月入府

<p>同貞近</p>	<p>廿九 厚東長門左衛門義武 守護代備前守武通 同貞近</p>	<p>守護代備前守武通 同行慶</p>	<p>入府</p>	<p>守護代厚東備前守武道</p>
<p>卅代 大内介殿弘世 御法名道階</p>	<p>正平十三年六月廿三当府御入部、同日御社参 御役人宮河若狭守・森掃部助、御騎馬五番如木 大宮司貞明</p>	<p>卅 大内介殿弘世 正寿院殿 正平十三六廿三当府入部</p>	<p>三十 大内正寿院殿 正平十三年丁酉六月廿三日当府御入部、同日両社御参詣 御役人宮河若狭守・森掃部助、騎馬五番</p>	<p>三十 大内周防助弘世 從四位少将、道階入道琳聖太子ノ末多々良姓也 正平三西六月廿三日当府著、両社へ御参詣、 御役人宮川若狭守・森掃部助、騎馬五番</p>
<p>同御代社頭皆造時御遷宮、 応安三年三月十一日御出仕在之 御役人宮河伊賀守頼直・陶山縫殿允弘高、御騎馬五番如木</p>	<p>同御代社頭皆造時御遷宮、 庚戌三月十一日御出仕在之 御役人(以下上段二同シ)</p>	<p>御役人(以下上段二同シ)</p>	<p>御役人宮川伊賀守頼直・陶山縫殿允弘実、騎馬五番各女来</p>	

<p>同貞明 守護代森入道法名良恵 其後宮河入道良覚 其後杉又次郎入郎智静 其後黒河近江守貞信 其後陶宮内少輔弘綱 其後任周防守 其後杉又次郎入道智静 兩度被持</p>	<p>同行慶 守護代森入道良恵 守護代宮河入道良覚 守護代杉入道智静 守護代黒河近江守貞信 守護代陶宮内少輔弘綱 任周防守 守護代杉入道智静</p>	<p>守護代森入道良恵 其次宮河入道良覚 其次杉又次郎入道智静 其次黒川近江守貞信 其次陶宮内少輔弘綱 其後任周防守 其次杉又次郎入道智静</p>	<p>守護代森入道良恵 其次宮川入道良覚 其次杉又治良知静 其次黒川近江守貞信 其次陶宮内少輔弘綱 任周防守、多々良姓也 其次杉又治郎知静</p>
<p>三十一代大内左京権大夫殿 義弘 御社参永和元年三月廿一日 御役人杉信濃守重直・杉大炊允儀安、御騎馬五番如木 守護代杉信濃守重直 其後杉大炊允儀安 後任対馬守 小守護代久佐備後入道源祐</p>	<p>卅一 大内左京権大夫殿 義弘 香積寺殿 守護代杉信濃守重直 同杉対馬守儀安 同行慶 同乘慶</p>	<p>三十一代大内左京大夫殿義弘 号香積寺殿 永和元年乙卯三月廿一日御入府 両社御社参之次第 御役人(上段二同シ) 守護代杉濃守殿重直 其次杉大炊允儀安 後任対馬守 小守護代久佐備後入道源祐</p>	<p>三十一代大内左京太夫多々良 義弘 永和元乙卯三月廿一日御入府、両社へ御参詣 御役人杉伊予守重直、騎馬五番各女来 守護代杉大炊助 小守護代久佐備後入道源祐</p>

<p>其後杉四郎範安 对馬守子息 大宮司貞実</p>	<p>守護代杉四郎範安</p>	<p>其次杉四郎範安 对馬守息 小守護代同人</p>	<p>其次杉・四郎範安 对馬守息 其次同人</p>
<p>三十二大内新介殿弘茂 同貞実 守護代陶山佐渡守高長 小守護代赤崎三郎左 衛門入道道清</p>	<p>卅二 大内介殿散位弘茂 守護代陶山佐^(渡)土守高長 同乘慶</p>	<p>三十二 大内介殿散位弘義 号真休院殿 応永八年辛巳十二月廿九日於当府下山合戦討死 守護代陶山佐渡守高長 小守護代赤崎三郎左 衛門入道道清</p>	<p>三十二大内助散位多々良 弘茂 応永八年辛巳十二月廿九日於当府下山合戦死 守護代陶山佐渡守高長 小守護代赤崎三郎左 衛門道清</p>
<p>三十三大内六郎御曹司盛見 其後任周防守 又任左京大夫 応永八年ヨリ御管領、 同九年三月九日御社参 御役人仁保八郎・弘中</p>	<p>卅三 大内六郎殿盛見 任周防守、後叙修理 大夫殿、又左京權大 夫殿、後ニハ左京大 夫殿、国清寺殿</p>	<p>三十三 大内六郎殿盛見 号国清寺殿 応永八年辛巳十二月廿六日從豊後御渡海、於 当府毘沙門堂御合戦、 敵悉被討捕之、於同所 律成寺御越年</p>	<p>三十三大内六良盛見 応永八年辛巳十二月廿六日從豊後御渡海、於当 府毘沙門堂敵悉被討捕 於律成寺御越年 同九年正月十一日入 部周防山口</p>

<p>勘解由左衛門重時、御 騎馬五番如木 大宮司貞清 後御法名徳雄 守護代陶尾張入道道琳^(弘長) 道琳 小守護代江良太郎左 衛門入道広慶</p>	<p>守護代陶尾張入道道琳 同慶祐</p>	<p>同九年壬午正月十一日 入部于周防山口 守護代陶尾張入道道琳 小守護代江良太郎左 衛門入道広慶 応永八年十二月晦日 着府 小守護代陶治部少輔 盛長</p>	<p>守護代陶尾張守入道道琳 小守護代江良太良左 衛門入道広慶^(慶) 応永八年辛巳十二月晦日着府 守護代陶治部少輔盛長</p>
<p>其後陶治部少輔盛長 後号中務少輔 小守護代安岐大炊 助盛輔 其後守護代陶徳房殿^(盛長) 盛長御子息 其後内藤肥後入道殿^(盛長) 智徳 応永廿七二十廿小守 護代着府</p>	<p>守護代陶治部少輔盛長 後号中務少輔 守護代陶徳房丸 中務少輔子息 守護代内藤肥後入道 智得 応永廿八被仰出之</p>	<p>其次陶徳房殿 盛長息 小守護代安岐大炊助 盛輔 其時内藤肥後入道智得 依在京、子息彈正忠盛</p>	<p>其次陶徳房 盛長息 小守護代安岐大炊助 盛輔 守護代内藤肥後守藤原 盛貞、号知徳入道</p>

<p>御代官御子息彈正忠盛賀(以下略)</p> <p>小守護代勝間田左近將監盛実</p> <p>後任備前守</p> <p>応永廿八年辛丑二月十一日盛賀着府、同日盛賀御社参、盛実毎年正月十一日ニ社参</p> <p>闕後小守護代勝間田孫六盛益</p> <p>備前守子息</p> <p>正長二年己酉八廿二ヨリ相統</p>		<p>賀入府、応永廿八年辛丑二月十一日</p> <p>同日両社々参、騎馬二騎各如木</p> <p>小守護代勝間田左近將監盛実</p> <p>後任備前守</p> <p>其後子息孫六盛兼(兼)</p> <p>後任左近將監</p> <p>正長二年己酉八月廿二日入府</p>	<p>依在京、息彈正忠盛賀</p> <p>応永八年辛巳十二月十一日着府、同日ニ社御参詣、騎馬貳騎各女来</p> <p>小守護代内藤五郎盛道</p> <p>守護代勝間田左近將監源盛実 後任備前守</p> <p>八幡太郎義家十六代也、内藤盛貞ノ弟也</p> <p>小守護代勝間田孫六盛益 任左近將監正長</p> <p>応永十二乙酉八月廿二日入府</p>
<p>三十四代大内刑部少輔殿持世</p> <p>永享三年辛亥七月三日ヨリ御管領</p> <p>守護代内藤蔵人丞盛貞</p> <p>永享三年任美濃守</p>			

<p>内藤肥州二男</p> <p>小守護代勝間田孫六盛益</p> <p>永享三年任左近將監</p>	<p>卅四 大内新介殿持盛</p> <p>勝音寺殿</p> <p>永享四年三月日</p>	<p>三十四大内新介殿持盛</p> <p>号観音寺殿</p> <p>永享四年壬子二月十三日從豊前朽網御陣御入府</p> <p>守護代陶越前守盛政</p> <p>同日着府</p> <p>小守護代安岐大炊助盛輔</p>	<p>三十四大内新助多々良持盛</p> <p>永享四壬子二月十三日從豊前朽網御陣御入部</p> <p>守護代陶越前守盛政</p> <p>同日着府</p> <p>小守護代安岐大炊助盛輔</p>
<p>三十五代大内新介殿持盛</p> <p>永享四年壬子二月十三日ヨリ御管領</p> <p>守護代陶越前守盛政</p> <p>同日着府</p> <p>小守護代安岐大炊助盛輔</p> <p>阿度被持</p>	<p>卅五 大内刑部少輔殿持世</p> <p>後任修理大夫澄清寺殿</p> <p>永享四年卯月廿二当府入部</p>	<p>三十五大内刑部少輔殿持世</p> <p>号澄清寺殿</p> <p>永享四年壬子三月十五日從石見入部于山口</p>	<p>三十五大内刑部少輔多々良持世</p> <p>永享四壬子三月十五日從石見入部山口</p>
<p>三十六代大内刑部少輔殿持世 重而御知行</p> <p>大宮司貞清</p> <p>永享四年壬子三月十五日石見ヨリ山口江御入部、同年四月十六日御受領修理大夫殿、五月</p>			

十二日於田舎御開アリ
永享四年壬子六月七日
匠作御下向、同九日御
社参

守護代鷲頭肥前守盛範

同四月廿二日府中入部

永享六年盛範名乗弘

忠卜替

小守護代円山因幡入

道道源、代官養子円

山左近将監氏兼執沙

汰

其後円山左馬助暨執

沙汰

永享七年正月五日名

代有吉伊賀入道浄仙

執沙汰

永享七年八月三日野

田民部丞為弘執沙汰

修理大夫殿持世、永享

守護代鷲頭肥前守盛範

後改弘忠

同四年四月廿二日入府

小守護代円山因幡入

道道源

同日着府

其次円山左馬助兼連

同六年八月日給之

其次有吉伊賀入道浄

仙、同七年正月五日

入府

其次野田民部丞為弘

後任備後守

同七年八月三日入府

同御代一宮上葺御遷宮

守護代鷲頭肥前守盛範

号弘忠卜

永享四年四月廿二日入府

小守護代円山因幡入

道道源

同日着府

兼連、同六甲寅八月

給之

其次有吉伊賀入道浄

仙、同七乙卯正月五

日入府

其次野田民部丞為弘

任備前守

同御代一宮上葺御遷宮

十二年庚申四月二日当

社上葺御遷宮時、持世

御出仕

御役人杉右京亮御幣御

執次・杉又次郎御劔

大宮司貞清

御騎馬守警固衆三百余

人御名代奔走

御祈禱師二宮神宮寺
別当実尊

在之

御役人杉右京亮御幣・

杉又次郎御太刀、警固

三百余人、守護代沙汰

永享十一戊午十一月

十五日丑刻

小役人杉右京亮御幣・

杉又次郎御太刀、警固

三百人守護代ノ御供

永享十一己未十一月十

五日丑刻

三十七代大内介殿教弘

嘉吉元辛酉八月ヨリ御

管領、其後嘉吉二年御

受領左京大夫殿

守護代如元鷲頭肥前守

弘忠

名代野田備後守為弘

大宮司賀田貞清

其後子息野田治部丞

弘賀相統

卅六 大内六郎殿教弘

永享十三六叙新介殿、

從五位下行兼左京大夫

多々良朝臣

文安六年六月御上洛時

昇進、從四位下行左京

大夫多々良教弘朝臣

長祿三年丁卯六月御得

度教弘 築山殿

守護代鷲頭肥前守弘

忠 被改之

三十六大内六郎殿教弘

号關雲寺殿

守護代鷲頭肥前守弘忠

小守護代野田備後守

為弘

文安三四月十五關焉

其次治部丞弘賀

為弘息

三十六大内六郎殿教弘

守護代鷲頭肥前守弘忠

小守護代野田備後守

為弘

文安三丙寅四月十五

日關焉

其次野田治部丞弘賀

為弘息

其後内藤濃州(濃息)法名有貞
名代南野左馬助盛時
文安四年丁卯九月廿
四日着府

宝徳二年庚午八月十七
日内藤濃州御社参、御
神馬御神楽料分五百疋
在之
享徳三年甲戌八月廿三
日内藤野州子息幸千代
丸殿社参、御神馬御神
楽在之

同実尊
文安四年八月廿二日
守護代内藤美濃入道
有貞

其次守護代内藤美濃
入道 智得息有貞
小守護代南野左馬允
盛時 後任若狭守
文安四年九月廿四日
入府

守護代内藤美濃入道藤
有貞
小守護代南野左馬允
盛時 橘姓也
文安四丁卯九月廿四
日任若狭守

其次守護代内藤大炊助
盛世 有貞息
同五年戊辰八月六日入
府 後賦下野守
小守護代南野若狭守
盛時
其次小守護代南野縫
殿允 盛時子盛道

守護代内藤大炊介盛世
有貞息
文安五戊辰八月六日
入府 賦下野守
小守護代南野若狭守
盛時
其次南野縫殿允盛道

三十八代大内龜童御曹司(龜弘)

御管領享徳三年甲戌十
一月ヨリ

享徳三年十二月ヨリ
内藤盛道
濃州子息内藤下野守
盛世名代相統之

大宮司賀田貞清

(大内)
左京大夫殿教弘御社参
御役人御幣内藤(弘盛)彦六・
御劔内藤又六、享徳四
年乙亥四月廿二日・同
廿四日有御参宮、社内
所々御掃除以下被仰付
之
龜童御曹司御社参

卅七 大内龜童丸

寛正三年壬午八月政弘、
後叙新介殿
御上洛之時、任左京大夫
從四位下多々良朝臣政弘
法泉寺殿

同実尊
守護代内藤下野守盛世
享徳二年癸酉十一月日
改肥後守

同乘尊
守護代内藤彈正忠弘矩
文明四年癸巳八月十二
日入国

同乘怡

三十七大内左京大夫殿政弘

号法泉寺殿

守護代内藤肥後守盛世
小守護代南野大膳進
盛鎮

其次守護代内藤中務丞
武盛

小守護代南野大膳進
盛鎮

其次守護代内藤弥七弘
矩 後任改彈正忠

文明四年壬辰八月十一
日以騎馬百余人初入府

小守護代南野大膳進
盛鎮

三十七大内左京大夫政弘

守護代内藤肥後守盛世
小守護代南野大膳進
橘盛鎮

守護代内藤弥七弘矩
任彈正忠

文明四壬辰八月十一日
以騎馬百余人初入府

小守護代南野大膳進
盛鎮

御役人御幣右田石見守^(貞徳)
・御劔杉兵庫助、御神
樂御神馬御軾料在之
長祿三年乙卯二月廿一
日

大宮司貞実
同時教弘殿様御同道在
之

左京大夫殿政弘御社参
御幣大宮司直上進上仕
候、御神樂料百疋、御
神馬一疋栗毛、御軾料
千疋
文明十年戊戌十二月六
日

大宮司賀田貞国
御名代内藤弾正忠弘矩
役人永富因幡守嗣久

(以上一筆、以下別筆ナリ)

其次厚安芸守
其次伴田入道宥盛
其次永富因幡守嗣久
文明四年壬辰四月八
日入府

同御代一二龜山御社参
同十五年九月十六日、
二宮一七七日御参籠、
御役人御幣右田弥三郎^(貞徳)
御太刀杉七郎、御騎馬
五番各如木、仍三社所
領御寄附焉
小守護代永富彦左衛
門尉貞嗣

其次原安芸守^(貞徳)
其次津田入道宥盛
其次永富周防守嗣久^(貞徳)
文明四壬辰卯月八
日入府
其次永富彦左衛門尉
貞嗣

同御代一二龜山御社参
四月十五日、
九月十六日二宮一七日
御参籠
御役人御幣右田弥三郎
御太刀杉七郎、御騎
馬五番各女来、仍三社
所領御寄附

三十九代大内権大夫殿義興

御社参明応六年丁巳正
月廿二日午尅、御幣御
取次杉兵庫助弘際、同
御騎馬五番、御軾御神
馬在之、御陣御首途、
御筒絹御小袴也、同年
九月五日当国守護代役
事、内藤掃部助弘春御
安堵也、仍小守護代当
府役勝間田左近将監十
二月廿四日着府、同日
参宮、軾料在之
当大宮司賀田貞道^(私書)
内藤殿御社参之事明応
七年戊午卯月廿二日、
御軾同御神樂料在之、
御幣御頂戴在之

卅八 大内権介殿義興

凌雲院殿^(寺)
守護代内藤肥後守弘矩
守護代内藤掃部助弘春
御祈禱師二宮神宮
寺別当乘意
明応八年己未三月
十三日彼職被仰出
了
同実盛
同年十月十五日安
堵御判頂戴之
守護代内藤彦太郎殿興
盛、文龜三年十月四日
入府
小守護代勝間田左近
将監矩益

三十八代大内周防介殿義興

号凌雲院殿
守護代内藤肥後守弘矩
小守護代永富彦左衛
門尉貞嗣
其次永富五郎矩詮
守護代内藤掃部助弘春
明応六年九月五日守護
御給候、同入府
小守護代勝間田左近
将監矩益
同六年十二月廿四日
着府
守護代内藤彦太郎興盛
任彈正忠、後賦下野守
文龜三年癸亥十月四
日入府
小守護代勝間田左近
将監矩益

三十八大内周防介義興

守護代内藤肥後守弘矩
小守護代永富彦左衛
門尉貞嗣
其次永富五郎矩詮
守護代内藤掃部介弘春
明応六丁巳九月五日
守護代被給之入府
其次勝間田左近将監矩
益
明応六十二月廿四日入
府
小守護代永富矩詮
守護代内藤彦太郎興盛
任彈正忠、後賦下野守
文龜三癸亥十月四日
入府
其次勝間田左近将監
矩益

	<p>次勝間田大炊助春運 次勝間田与一息盛家 後任左近將監</p>	<p>其次勝間田大炊助 春運 矩益息 其次勝間田与一盛家 春運息 後任左近將監 大永四年甲申十二月 小守護代給之</p>	<p>小守護代勝間田大炊 介春運<small>(連)</small> 。守護代勝間田与市 盛家 任左近將監・伊賀守 大永四甲申十二月廿 六日。守護代給之</p>
	<p>卅九 大内從五位下周防介 多々良朝臣義隆 竜福寺 享祿貳年己丑十二月 十日 守護代内藤彈正忠興盛 小守護代勝間田左近 將監盛家 小守護代同息孫六盛 治 宋範弟子 同宥範</p>	<p>三十九大内大宰大貳殿義隆 号竜福寺殿 守護代内藤下野守興盛 小守護代勝間田左近 將監盛家 其次勝間田孫六盛治 盛家息 天文十二年癸卯十一 月廿一日小守護代給 之、同廿四日入府、 同天文十七年戊申正 月三日御屋形様<small>(義隆様)</small> ヨリ被任左近將監</p>	<p>三十九大内太宰大貳二位義 隆 守護代内藤下野守興盛 小守護代給盛圖書 其次勝間田左近將監 盛家 小守護代勝間田孫六 盛治</p>

	<p>四十 大内左京大夫殿義長 国務天文廿一季ヨリ 豊後国大友殿二男 守護代内藤下野守興盛 下野守興盛孫 守護代内藤彦太郎隆世 後任彈正忠、天文廿四 季 小守護代勝間田左近 將監盛治 後任備前守</p>	<p>右系図并守護代記事、興盛<small>(内藤)</small> 様依御所望、正本山口へ上 申之、御倉に在之、仍為後 証案文誌置所如件 天文十八年三月十五日 勝間田左近將監 盛治</p>	<p>右系図并守護代記、一族内 藤・興盛依所望、正本写遣、 彼方倉置之、為後証案文認 置所如件 天文十八己酉之 三月十五日 勝間田左近將監盛治</p>
	<p>四十 大内右京大夫義長<small>(左)</small></p>		<p>守護代陶尾張入道全姜 小守護代陶五郎隆房 其次内藤修理匠隆世 任下野守 其次三崎監物 其次勝間田備前守盛治 于時享保十二丁未九月上旬 書之</p>

以下長門二宮本のみ、(イ)は豊府史略による

安芸国吉田住

四十一毛利備中守隆元 從弘治三年国務ナリ

守護代内藤左衛門大夫隆春

同小守護代勝間田孫六春景 盛治息也

四十二毛利右馬頭輝元 從永祿六癸亥年国務也

(イ)文祿三年被任中納言
文祿三年ノ比被任黃門之位也

守護代内藤左衛門大夫隆春

同小守護代勝間田大炊助春景

(イ)從天正十六年豊西郡代官職豊東郡奉行律成寺知之

御祈禱師二宮神宮寺別当宍

宍範ノ弟子同宍印 從天正三乙亥年勤之

從天正十六戌子年当所代官職律成寺興順存知之

豊東郡奉行モ從前々被知之

御祈禱師二宮神宮寺別当尊信

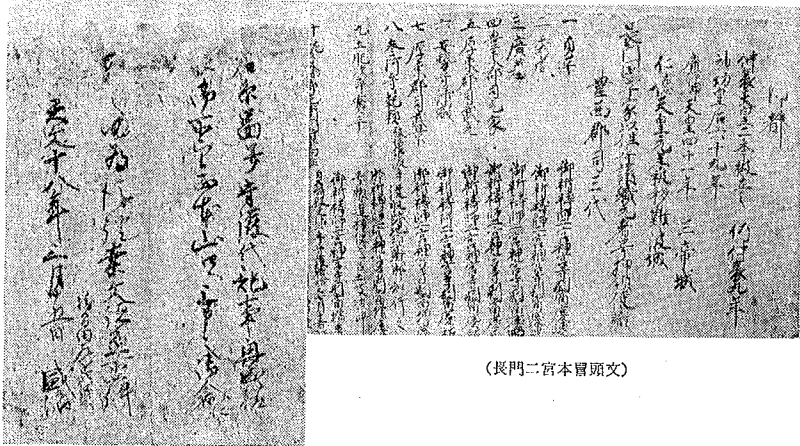
同天正十六戌子年ヨリ勤之

四十三毛利宰相秀元 從慶長四己亥年国務也

(イ)守護代
小守護代宍戸伯耆守元富

御祈禱師二宮神宮寺別当尊信

從慶長七壬寅年小守護代西次郎(當房)左衛門尉以節入道



(長門二宮本買頭文)

(山口内藤家本奥書)